

大城ひかるのベトナム



通信

-21-

シンチャオ
(Xin chào)
おきなわ



ホーチミン校には約80人の教師が在籍し報連相は主にメールやチャットアプリを使う（筆者撮影）

大抵は楽しいベトナム生活ですが、中には不快なことや居心地の悪いこともあります。人と人との接触、特に異文化の中での接触ですから、誤解や間違い、イラツとすることはよくあります。10年以上こちらに住んでいる諸先輩方からは「こん

なものだよ」と笑われることが少なくありません。確かに後で振り返ると、どうでもいいことが圧倒的に多いものです。日本語教育では、新しい文化に身を置いたときの衝撃、簡単に言えばカルチャーショックから回復する過程を「異文化適応」と呼んでいます。カルチャーショックはどこでも起こり、例えば田舎暮らしに慣れて都会から移住してきたのはいいけれど、その土地に馴染めずまた帰っていくケースは日本中で見られます。沖縄移住者にも多いですね。それまでの生活とのギャップが大きければ大きいほど、ショックも大きくなるようです。会社や部署が変わったと

黙っていては伝わらない

きも新しいやり方に戸惑うことがあります。これも一種のカルチャーショックでしょう。適応するまでには、ある程度時間が必要ですが、時にはあえて衝突してみるというのが私の持論です。例をいうと、日本人同僚の間でなかなか返事をしないことで有名なベトナム人の先生がいました。2回、3回メールを送っても返事が来ないので、しびれを切らした日本人はいろんなチャットグループで呼びかけるのですが、返事はいつもギリギリ。後になって聞いたところ、その先生は別のところから情報を待っていて、それが届いたら返事しようとしていたとのことでした。

た。事情が分からないので日本人はイライラし、その先生は「返事したのに礼も無しか」と機嫌を損ねるわけです。こんな教科書に出てきそうな「異文化誤解」がしょっちゅう起こります。しかし、その先生には誰も何も言わないので、私が直接伝えることにしました。まずすぐ返事を出し自分の状況を知らせて欲しいこと、状況が分かれば日本人は安心することなどを話し、ついでに「先生はそれをやらないので、日本人にとっても評判が悪い」と付け加えました。余計な一言ですが、笑ってくれて、それ以降、早く返事をくれるようになりました。

たのですが、何度断つても勧めてくるので、はっきり言うことにしました。沖縄のおばあさんを例に出し、戦後満足に食べられなかったため、今でも相手のことを心配してお腹いっぱいなのに「食（か）めー食（か）めー」と勧める話しました。遠慮しているわけではないと納得し、それからは自分で「あ、沖縄のおばあさん」と言って引き下がってくれます。いつも成功するとは限りませんが、黙っていたは何も変わらないので、私は正直にぶつかることにしています。今の課題はシャンプーが下手な美容室のスタッフ。言葉が通じない中、どうしても不愉快な場面を避けられるのか考え中です。この話はまたの機会に。ご意見・ご質問をお聞かせください。oshiro@kaizen.edu.vn

©kaizen.edu.vn